
エクストラ!!

グランシェス(エドワード&ロスト)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エクストラ！！

【Nコード】

N5635P

【作者名】

グランシエス（エドワード&ロスト）

【あらすじ】

イジメられている学生はある日、人が変わったように凶暴になる
そして絶望を味わい続ける・・・
悪夢のように

(前書き)

注意!!

この作品にはかなり残酷なシーンがあります

また人が人を傷つけるシーンが多いので

ダメな方は違う作品をおススメします

人と少し違うだけで拒まれる
なら・・・僕らは何処で生きればいいのか？

学校

亮「おい、バケモノ。タバコ買ってこい」

いつものように僕は殴られ顔に痣を作りながらパシリをさせられる

武雄「うん・・・わかったよ」

僕は峰岸 武雄

昔から人と少し違って引越しが多くて友達が出来ないでいる

引越しだけならいいんだけど僕はそれに加えてたまたまに記憶が無くなる

そのせいで記憶が無い間に何をしているかわからない

それで『バケモノ』だとか回りから非難されている

記憶が無いから言い訳しようにも出来ない

僕は遮 亮君の頼みを聞くしかない

そうしないと僕は怖くなる

僕が僕じゃなくなるみたいで・・・

いつものように僕は学校近くの自販機でタバコを買う

もちろん未成年だから警察に見つかると補導される

だから、僕は隠れてタバコを買う

亮君はお金を出さないから僕が結局出している

僕はタバコを吸わない、だって未成年だし臭いが嫌いだから

武雄「あ・・・あんなところに警察がいる・・・」

どうもパトロール中らしい

僕は堂々と出来ない自分が恥ずかしくもあり悲しい

だけど、記憶が無い間の僕の事を僕は知らないから堂々とすることも出来ない

僕は警察のパトロールを掻い潜り学校に戻る

もちろん普通に入れないから旧門の方から

亮「遅いぞ、タバコだけで何分かかってんだ」

僕は弱いからいつも殴られる

そして、タバコを奪われる

武雄「ごめん・・・警察がパトロールしてたんだよ・・・」

今にも泣きそうな僕を見てイライラする亮君

顔を窺っている余計に機嫌を損ねるから僕はいつも我慢する

亮「パトロールだ？ お前が捕まるうが関係無い、お前は俺の為に

働けばいい」

いつも浴びせられる罵声だけど今日は一段と心に刺さる

武雄（やっぱり・・・僕は必要無いんだ・・・）

僕は顔では笑顔でいるけど心で泣いた

???（やっぱ、お前はダメだな）

何処からか声が聞こえる

亮君・・・じゃない

何処からだろう・・・

聞いた事も無い声に僕は不安になる

その不安が僕の意識を遠ざける

武雄（怖い・・・怖いよ・・・）

心の中で叫ぶとそのまま意識を失った

意識を失ったはずなのに亮君の声が聞こえる

亮「おいバケモノ、何ポーっとしてるんだよ」

どうやら怒っているようだ

だけど僕は目を開ける事も出来ずまったく動けない

???「うるせえな・・・」

あれ？ さっきの声・・・

亮「誰に口聞いてんだ？」

ああ・・・怖い・・・怖いよ・・・

「????」誰に口聞いているだつて? 笑わせるな、テメエこそ誰に口聞いてんだ?」

この声の人も怖い・・・

でも、僕はどうなってるの?

僕はどうなっちゃったの?

不安だけが辺りを埋め尽くしている感じで息苦しい

亮「こんのっ」

亮君が誰かに殴りかかった?!

でも、何かを殴った音は聞こえない

「????」ああ? テメエいい度胸だな この俺に殴りかかるなんてな」

この人・・・誰なんだろう・・・

僕はそう思いながらも自分の状況を把握しようとする

すると、誰かが誰かを殴った音が聞こえた

亮「ぐはっ」

えっ?

亮君が殴られた?

「????」「ったく・・・こいつは・・・」

殴った手が痛いのだろうか?

それに何かを引きずる音が聞こえる

「????」武雄の奴・・・いい加減気づけよな」

この人は僕を知っている?

だけど、僕はこの人を知らない・・・

「????」俺がわかかんねえのか?」

あれ? 僕は声を出していないのに・・・

なんでわかるんだろう・・・

「????」「・・・いい加減にしろ、俺を忘れるなんて酷いんじゃないか?」

口調は怖いけど優しそうな感じがする

弾「この俺、峰岸 弾を忘れるなんて武雄は記憶力悪いな」

峰岸・・・弾？

峰岸 弾と言う名前に聞き覚えがあった

前に僕がそう名乗っていたとかつて先生が言つてたっけ・・・

弾「いい加減、起きろ。俺の寝床を黒い霧で覆うんだしやねえ」

寝床？

黒い霧？

何を言つてるのか僕にはわからない・・・

弾「あゝ、めんどくせえ。こいつは体育館倉庫にでも放置するか」

こいつ？

亮君の事？

意識がどうのつて以前に恐怖で思考が混乱する

弾「だゝ、うるせえ。そう、ぶつぶつ言つてんじゃねえ」

文句を言っているが特に殴られる気配も無い

弾「お前がそんなんだから俺みたいなのがいるんだろが・・・」

僕のせい？

一言一言が心に刺さる感じなのに痛みを感じない

僕はどこかがおかしくなったのかと思つた

弾「何処もおかしくねえつて、『俺はお前』で『お前は俺』だ」

え？ どういうこと？

僕の思考はどんどん狂つていく

弾「あゝもう、めんどくせえ」

なんだか怒っている

亮「ん・・・ん？」

すると亮君が目覚める声が聞こえた

弾「あゝ・・・起きちまつたか、仕方ない。お前には悪いが・・・」

亮「ああ・・・許してくれ、悪かった、俺が悪かったから、許して

くれええ」

何かを言いかけているみたいだけど亮君の泣き叫ぶ声で聞き取れない

亮「ああああああああああああああああああ」

それと同時に亮君の悲鳴が聞こえた

何も見えない僕からはどうなったのかわからない
ただ、音声のみがダイレクトに状況を教える
何かを殴る音

そして、何かを蹴る音

弾「ふんっ、殺す価値は無いな」

殺す・・・亮君を?!

だけど、殺す価値が無いって事は殺されないうって事・・・だよ
それをまだ混乱する頭で把握すると少し安心した

亮「いてえ・・・いてえよ・・・」

亮君の泣き声が聞こえる

弾「痛がつてんじゃねえ、お前が武雄にした事と同じ事をしただけ
なんだからな?」

同じ事?

やっぱりわからない・・・

僕は混乱する頭で考える

考えれば考えるほどに混乱して気持ち悪い

亮「武雄お・・・許してくれえ、何でもするから許してくれえ」

そんな事を言う亮君は初めてだ

僕は許そうかどうか混乱した頭で悩む

弾「ふんっ、許して欲しいなら・・・そうだな、ここで全裸になれ」
えっ?

僕、そんな事望んでない

亮「えっ?　なんで?」

僕は望んで無いし亮君は意味がわからないみたい

弾「早くしろ」

だけど、弾は命令を続けた

服を脱ぎ始める音が聞こえる・・・

どうやら亮君が渋々脱ぎ始めたようだ

服を脱ぐ音が聞こえなくなった

弾「それも脱げ」

どうやら下着は脱ぐのを嫌がっているようだ

泣きながら嫌だと言う声が聞こえる

弾「・・・嫌なのか？ なら手伝ってやる」

そう言うのと下着を脱がされる音が聞こえた

それと同時に何かが地面に落ちたような音が聞こえた

どうやら脱がされて脱力して座りこんだらしい

弾「さてと」

まだ何かやるつもりなのか

弾が考える

その考えは僕の頭にもダイレクトに映像で伝わってきた

僕は悲鳴をあげる

それと同時にイジメてきた相手を助けようとしている

武雄（亮君・・・逃げて！！）

僕は必死に叫ぶ

しかし、亮君には絶対に聞こえない

弾「よし、決めた」

弾が何かを探し始めたようだ

弾の歩く音が聞こえるが他に足音とかは聞こえない

亮君は座りこんで放心状態なのだろう・・・

弾「お、あったあった」

弾が何かを見つけたらしい

弾「うっし、今からお前を縛る」

えっ?! 縛る?!

亮君も驚いたようで声が聞こえた

どうやら弾が探していたのは紐のようだ

亮君の泣き声以外はしばらく何も聞こえなかった

どれくらい時間が経過しただろう

弾の音が聞こえ始めた

弾「・・・これでいいだろう」

どうやら紐を縛り終えたらしい

どうもきつめに縛ったのか紐が音を出している

亮「いつてえ・・・もう、しないからこのロープを外してくれ」

羞恥しているのか泣きながら訴える亮君

弾「しばらく遊んだらな」

遊んだらって・・・言っても外すつもりはないらしい

そんな考えが伝わってくる

僕は嫌がりながらも亮君の泣き叫ぶ声を聞くしかなかった

しばらくして

弾「飽きたな」

弾が飽きたらしい

亮「ま、待ってくれよ。ロープ外してくれるって言ったじゃんか」

立ち去ろうとするのか足音が聞こえる

亮君の話を聞く限り弾がロープを外さないでいるのがわかる

弾「はあ？ お前も嘘をつくからな、俺も嘘をつく」

子供じみた言い訳だ

それを聞いてか亮君が再び泣き始めた

弾「じゃあな」

そのまま放置して弾が去るらしい

声がどんどん小さくなっていく

どうやら弾と僕は同じらしい

弾「ははっ、やっと理解したか」

理解したとわかると笑い出す弾

弾「お前が望んだから俺はいる、そしてお前はそのまま心の檻にい

ればいい」

望んだから？

僕は絶望と共に自由を奪われた事を理解した

自由を奪われても声だけは聞こえる

どうやら弾はそれで僕が苦しむのを楽しんでいるようだ

この日、僕は望まないまま自由を失った

そして僕は僕でなくなった

僕の心の影に僕は自由と僕自身として生きる権利を奪われた

そして声だけを聞かされて絶望を味わい続ける

悪夢のように

(後書き)

短編第6弾

え〜・・・前回に続き重苦しい作品で申し訳ない

一応は自分の経験を基に残酷なシーンを多くしてしまいました

イジメを経験し多重人格が覚醒

これは実際に作者がなっているので多重人格の一例としてはかなりリアリティがあると思います

まあ・・・ここまで酷くはなりませんでしたが

多重人格者は記憶が無いのに行動した事実があったりします
作者は意思を共有する事で記憶の消滅を防いでいます

話しがずれたので戻しますが

音だけで表現するのは難しいです

しかも「バン」等を使わないって決めているので
表現が難しい

一応今回は暴力系を書けるかのテストだと思ってください

出来れば感想をお願いします

さて、ここまで読んで頂きありがとうございます

今回は暴力系ですが他は違うので

他の作品もよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5635p/>

エクストラ!!

2011年10月8日12時28分発行